

7. 彼は痛めつけられた。

彼は苦しんだが、口を開かない。

ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

8. しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。

彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。

彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。

9. 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。

彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかったが。

説教

「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。

主の御腕は、だれに現われたのか。」 (1)

預言者イザヤが描く、

信じられないほど惨めな救い主の姿、

それは世の所謂ヒーローとはほど遠い、

体格は良くないし、顔も見栄えもしない、

堂々たる威厳もなく、間違ってもそのようになりたいとは全然思わない、

いや、それどころか絶対にそうはなりたくないほど惨めで呪われた姿でありました。

でも、それはキリストが私たちのために惨めな呪われた生涯を生きられたからだといザヤは言います。

キリストは罪に呪われて永遠の地獄のさばきを受けなければならぬ私たちのために、

私たちの身代わりになって、私たちが受けるべき罪のさばきを受けてくださったから、キリストは惨めに呪われたのです。

キリストの貧しさ、

キリストの惨めさ、

キリストの呪われた姿は、

実に、罪深い私たちを救うためであったのです。

ですから、

キリストのその惨めな呪われた姿こそ、まさしく私たちを罪から救う救い主の姿そのものでありました。

「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。

彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。」

「主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」 (4-6)

そして、(5節後半)

「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」のでした。

そして、今日の箇所です。

続く7節では、

キリストが具体的にどのように苦難を受けられたかが説明されます。

これまでをまとめると、

まず、1-3節では、キリストの惨めな姿が描かれ、

4-6節では、そのキリストの惨めな姿が私たちの身代わりによることであったことが描かれ、

そうして7-9節では、実際にどのように受難なされたかが描かれます。

その受難の具体的な姿として、キリストが死に至るまで従順に神に従い通した姿が描かれます。

7. 彼は痛めつけられた。

彼は苦しんだが、口を開かない。

ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

「ほふり場に引かれて行く小羊」も

「毛を刈る者の前で黙っている雌羊」も、自分の罪のため、あるいは自分のために犠牲になるのではありません。

人間の罪のため、あるいは人間のために、屠られ、あるいは毛を刈られます。

そして、このような、人の益になる行為は、誰かから強いられて行ったものではありません。

「彼は痛めつけられた。

彼は苦しんだが、口を開かない」

これを詳細に訳すと

「彼は虐げられた。

そして、虐げられている間、彼は自発的に苦しみを受けて口を開かなかった」となります。

つまり、キリストは、ご自分からあえて苦しみを受けられたこととなります。

イザヤは、「口を開かない...黙って...口を開かない」という具合に、

キリストが父なる神の御心に最大限の従順をなしたことを表現します。

「彼は痛めつけられ...

苦められ...

ほふり場に引かれ...

取り去られ...

打たれ...

絶たれ...

葬られた」という具合に、

7節から9節までずっと受身形の動詞が繰り返し繰り返し述べられて、

父なる神さまがお与えになる

苦難、艱難、罪の罰、人間の罪に対する呪いと刑罰を、ただ黙々と受け入れ続けるキリストの姿が記されます。

父なる神さまがお与えになるさばきを、キリストは自ら自発的に黙々とお受けになったのです。

この事実は極めて重要です。

なぜなら、

もしもキリストがご自分の意思によって十字架に架かられたのでないならば、キリストの死は無意味だからです。

もし、キリストが、本当は十字架で死にたくないのに、

父なる神に無理矢理強制されたので仕方なく死なれたのなら、人の罪を贖う資格がありません。

なぜなら、義人以外に罪人の罪を贖うことはできないからです。

罪人が神に打たれて死んでも、それはただ自分の罪のためです。

自業自得です。

罪人は、人の身代わりになって死ぬことはできません。

人を殺して死刑執行を待つ死刑囚が、自分と違う死刑囚の身代わりになって死ぬことはできません。

たとえ死んでも、それは誰かの身代わりの死ではなく、自分の罪をさばかれての死だからです。

罪人の身代わりになれるのは、罪のない人だけです。

義人だけです。

義人とは何でしょうか？

どういう人が義人でしょうか？

それは、一言で言うと、「神に従う人」です。

反対に、前回学んだように「罪人」とは「神に逆らう者」のことを言います。

「罪人」とは「神に従わない、神に逆らう、神に反逆している人」を意味するので、

その反対の「義人」とは、「神に従う人」を意味します。

そして、人の罪を贖うことができるのは「義人」だけです。

神に従う「義人」だけです。

父なる神に完全に従順に従い抜いた「義人」だけが、神に背く「罪人」の身代わりになることができます。

そして、「罪人」の罪を贖うことができます。

イエスさまは、喜んで父なる神さまに従いました。

この世に生まれ出よと言われれば、喜んで生まれ出ました。

死ねと言われれば、ジタバタせず黙って死にました。

しかも、罪人の死を、罪人として死ねと言われれば、恥も外聞もかなぐり捨てて、罪人の死を死なれました。

神のさばきを受けて、木にかけられて、神に呪われた死を死なれました。

「彼の墓は悪者どもと共に設けられ、

彼は富む者と共に葬られた」（9）のです。

ここで言う「富む者」とは、大々的に「不正をもって民衆を圧迫して蓄財している者」のことを意味します。

カルヴァンがこのところをこう解説しています

「預言者がここに『富める者』と語ります際、これは最も暴虐な者たち、

また手綱を解かれて、ほしいままにあらゆる狼藉をはたらく者らを名指しているものの如くであります。

なぜなら、人々は、信用を博し、豊かであるときには、

他の人たちから恐れられるので、常に権勢を欲しいままに使う、ということを私たちは知っているからであります。

生活を質素に、節度をもって切り詰める者はまことに少なく、
悪をなす手段を用いるに当たって人情味を示す人間はまことに少ないのであります。
貧乏人の場合について申しますならば、
彼らはよし、己れ自身に於いては随分傲慢なところがあるとはいえ、余儀なくこれを押さえられております。
ですから、悪は隠れて表には認められません。
しかし、金持ちや、それだけ持っている人たちは、
自らを蝶番から外して、自分は何をしても正しいのだ、と思うのであります。」

つまり、イエスさまは、
罪人の死を死なれ、
木にかけられて、
神に呪われた死を死なれて、
「悪者どもと共に、そして、もっと悪い富む者と共に葬られ」（9）ました。

そして、これらすべてを、喜んでそうなさったのです。

ヘブル書の記者は

「イエスは、

ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍んだ」（12:2）と証言しました。

預言者イザヤは

「彼は痛めつけられ...苦められ...

ほふり場に引かれ...取り去られ...打たれ...絶たれ...葬られた」が「口を開かない!...黙って....口を開かない」と証言します。

イエスさまは完全に父なる神さまに従い抜かれました。

イエスさまは義人だったのです。

イザヤは、私たちとキリストを、同じ「羊」に喩えています。

でも、同じ羊でも、

私たちは、「羊のようにさまよい、各々自分勝手な道に向かって行った」のに対して、

キリストは、ただ黙々と神に従い抜きました。

そして、キリストは「わたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれ」ます。

父なる神さまは、

私たちの罪と呪いをイエスさまの上に負わせて十字架で殺し、

同時に、義人であるイエスさまの「義」を私たちの上に転嫁なさいました。

こうして、

イエスさまは、私たちの「罪」を負って、十字架で神に見捨てられて死なれ、

私たちは、イエスさまの「義」をまとして、天国に行くことができます。

私たちは何一つ神さまに従い得ない『罪人』であるにもかかわらず、

死に至るまで、実に十字架の死に至るまで神に従い抜いたキリストの「義」をまとして、

あたかも自分がキリストと同じく神に100%従い抜いた「義人」と神さまに認められて、天国に入ることができるのです。

私たちは、このようにして、天国に行くことができます。
キリストを信じる者は誰でも天国に行くことができます。
これは聖書の言う最も大切な教え、「福音」です。
でも、どういう仕組みで天国に行くことができるのか、
キリストが私たちの罪を贖ってくれたので、私たちは天国に行くことができるという、それはそうです。
でも、それは具体的にはどういう仕組みで、どういうメカニズムで私たちは救われるのか、それを53章が教えてくれます。

私たちは神に背いて神の怒りを受けるばかりになっているが、
その罪を神はキリストの上に負わせて十字架につけて殺し、
死に至るまで従順に神に従い抜いたキリストの義を、神は私たちの上に転嫁して、
私たちがあたかもキリストのように神に100%完全に従い抜いた者であるかのように認めて、天国に入れて下さるのです。

まだイエスさまを信じておられない方は、
今日この時イエスさまを信じて、
イエスさまの義を神さまからいただいて、天国に入る祝福に与ることができるよう祈ります。

すでにイエスさまを信じておられる方は、神さまの恵みに感謝しましょう。

イエスさまの恵みに心から感謝を捧げましょう。

私たちは、自分勝手に生きていて、何一つ神さまに従って生活していないにもかかわらず、
しかし、私たちの身代わりになって神への従順の生涯を全うされたイエスさまの義をただでいただいて、
イエスさまのように100%神さまに従う者と認めていただいているのです。
神さまは、イエスさまの義を見て、この100%不従順な者を、100%主に従う者と認めてくださるのです。
それで、私たちは、天国に入ることができます。
そうでなければ、どんなに私たちが努力しても天国にはいることは絶対にできません。

イエスさまの恵みにより100%主に従う者と認めていただいた私たちは、
心からの感謝と喜びをもって、主に従って生きて行きたいと願います。